20007

ＩＣＤ植え込み術に拒否が見られた患者の心理過程の変化～コーンの危機理論を用いて～

【目的】どのような治療においても、患者の心理状況を観察しながら、不安を和らげるような精神的ケアを行う事は看護師の大きな役割の一つである。しかし、それはどのような場面でもスムーズにはいかない。患者個々の病態を含め、全人的背景を把握した上での関わりが必要となる。今回、突然の植え込み型除細動器(以下 ICD)植え込み術施行に伴うボディイメージ障害を持つ患者の心理的側面の過程と看護ケア・介入をコーンの危機理論（突然の身体障害を伴った患者の障害受容に至るプロセス）を用いて振り返り看護の基本を考える。

【方法】対象患者の背景・入院時の状況・会話・行動からコーンの危機理論を用いて、ICD 植え込み術を受け入れるに至った心理状況の変化の過程を考察していく。

【結果】コーンの危機理論では「ショック→回復への期待→悲嘆→防衛→適応」の過程を辿る。対象者は ICD を機械という捉え方をしており、それにより自己のボディイメージが強く障害されることから、説明を聞く事を拒否し回復への期待・悲嘆を繰り返していた。その中での看護を通し、患者の意思尊重・受け入れ・本心と向き合うことで受容への過程を辿ることに繋がった。

【結論】全ての人が受容の過程に辿り着くとは限らないが障害の程度や危険性に関わらず、その人がもつボディイメージが変更されることで、それぞれの危機を感じ、それぞれの経過を辿ることが分かった。看護者は、そのことを改めて考え、その患者の持つボディイメージや思いを踏まえ、寄り添った看護を行っていくことを改めて大切であると考えられる。

評価１	評価２		評価３		採否
発表日時　月　日（第　日）	ｾｯｼｮﾝ		会場		時　分～　時　分

受付番号 [　　]　　演題番号 [　　]